

令和3年度第2回学校運営協議会 概要

嶺北高等学校

日 時 令和3年11月18日(木)

14:30～16:00 授業「嶺北探究」参観・代表生徒との懇談

18:00～19:30 委員による協議会

会 場 嶺北高等学校 ホーム教室・視聴覚教室・第一会議室

◇委員名簿

No.	区 分	氏 名	出欠	No.	区 分	氏 名	出欠
1	学校関係者	山田 憲昭	○	6	地域住民	高橋 清人	○
2	保 護 者	神野 理江	○	7	地域住民	徳橋 正人	○
3	学校関係者	岩本 誠生	○	8	地域住民	山下 由子	○
4	学校関係者	高石 清賢	○	9	地域住民	油野 昭彦	○
5	学校関係者	松岡 寛	○	10	地域住民	山首 尚子	

学校運営協議会事務局 和田 拓 (嶺北高校 教頭)
「嶺北探究」担当 田邊 法人 (嶺北高校 主幹教諭)
「嶺北探究」担当 三谷 七香 (嶺北高校 地域学校協働活動推進員)
高知県教育委員会 葛原 彩子 (高等学校課 指導主事)

《委員による協議会の概要》

1 開会

会長挨拶

2 報告・協議

○生徒の活動記録(コース・部活動等での主な活躍や3年生の進路内定・合格状況等)について事務局から説明。

○令和3年度学校経営計画・学校評価(中間評価)について事務局から説明。

○「嶺北探究」の取り組み状況について主幹教諭ならびに地域学校協働活動推進員より説明。

○事務局から2年生マイプロ発表会、3年生ファイナルレポート、委員懇親会、第3回協議会等について事務連絡。

3 協議

委員による協議では以下の質疑応答や意見交換等が行われた。

○生徒の活動記録や現状について

【徳橋委員】

・進路合格状況で短期大学の数が少なく専門学校が多いのは最近のトレンドと

して手に職をつけたい・専門技術を身につけたいという傾向になってきているということか。

【山田委員】

- ・保育士や幼稚園教諭の免許取得が短大の傾向としてあるが、それらは専門学校でも取得できるようになっており、どちらか悩んだ結果、専門学校を選ぶという判断をしている生徒が多く、そのため短大が少なくなっている。以前は栄養の分野で短大に進む生徒もいたが、今は管理栄養士になって学校給食・病院給食等に関わりたいという生徒が短大ではなく四大を志望するという傾向にある。

【松岡委員】

- ・進路希望状況について、私も役場の職員であるが、できるだけ地元の方に受験してもらいたいという気持ちがある。実際には県外・町外の方が多い状況。学校が生徒と進路について話し合う中で、本山町に限らず土佐町等も含め地元に残るという意味で、そういう声は実際あったらどうか。

【山田委員】

- ・この学年が最も公務員志望者が多い。ただし、本山町役場や土佐町役場に就職するにしても、高卒ではなく上級学校を出たうえで貢献したいという意識を持っているようだ。明確に聞いているのは本山町2名、土佐町1名ほど。昼間の懇談会に来ていた生徒のうち1人の男子は土佐町の役場を志望しているが、これから高知大の地域協働学部を受験する。これまではあまりいなかったが、そうやって明確に町作りのことなどを語る子が3年生に出てきたことは非常にうれしい。より高みを目指して学問として勉強してから戻ってきたいという生徒に対しては、できるだけそれを応援したい。そのほかに警察事務や県庁職員を志望している数名の者が専門学校の公務員学科へ進学する予定。公務員についてはこれまで志望者がいなかったが現3年生は非常に多く、地元の役場や県庁を目指してくれることが頼もしく、応援している。

【高石委員】

- ・今日の授業参観と懇談会を通して、生徒の自己肯定感・存在感が随分と高まってきたと感じた。いきいきとして自信ができており、学校や仲間を誇りに思っている。8年ほど前に感じた傾向が再び見えてきており、良い傾向であると嬉しく思った。そういう状況が学校経営計画の評価の中でどう関わるのかは分からないが、評価に現れないところでもかまわないので「生徒たちのこういうところが高まってきた」というような傾向があれば聞かせてもらいたい。

【山田委員】

- ・コロナ禍が抑えられている状況で、校長室に相談をしに来る生徒は増えてきた。今日の懇談会にいたメンバーの中にも1回は来ている者が数人いるが、自

分が疑問に思っていることやコロナ禍の収まりの中で行事を見直してほしいという要望を伝えに来るなど、自信は高まってきていると感じている

- ・県独自アンケートの1年生の結果では、1年生はどうしても仕方ない部分もあるが、自分の夢や希望をしっかりと持っているというパーセンテージは下がっていた。いちばん悩ましい時期であり、コース選択の希望は出したが進路がまだ具体的には定まっておらず、様々な刺激がある中で揺れているという生徒もいる。4月の第1回アンケートでは、入学直後で約8割に夢や希望があるが、2回目の今回は約7割に下がっている。人数としては3～4人ほどだが、そういう生徒たちを、少人数の学校として日々追いかけていかなければならないと考えている。

【事務局】

- ・今の話にもあったように、例えば生徒の活動記録の中にあるミニ体育祭などは、中止と発表していた体育祭を、生徒の声を受けて再検討し実現した。「生徒が学校に言っても無駄」と諦めるのではなく、学校と一緒に考えてくれるという希望を持って通ってくれていると実感している。
- ・今日の懇談会の中で話題の出た現2年生の修学旅行については、コロナ禍を受けた旅程変更で、現3年生と同様に年度が開けて3年に進級してから1泊2日程度で県内を巡る行程に変更することとなっていた。ただ、現2年生には、この1年間だけ「地域みらい留学365」という制度で本校に通学する生徒が2人いる。親しくなったその子たちが本校に通っているうちに一緒に行きたいという思いが生徒には強くあり、校長への相談やPTA役員会での議論を受けて、当初の予定期間内に戻し2泊3日程度の県内旅行というかたちで再企画することとなった。生徒が学校に対して積極的な要望を述べるということは、学校に一定の期待を持っているということであり、明るく前向きに学校生活を送ってくれていることと認識している。

【高石委員】

- ・以前、尾崎知事が嶺北高校を訪問した際に、「地元に残りたい」という生徒が90パーセントいるという自己肯定感の高さに感動したという話を聞いて私自身も大いに感動したが、今日の「嶺北探究」の発表でも「人口を増やしたい」「嶺北地域に帰ってきたい」という話が留学生からあり、そういう思いが育っているのかと、地元の生徒がどのくらいの思いを抱いているのかは分からないが、地域への思いが育ってきていることを喜ばしく感じた。

【山下委員】

- ・私も「留学生なのにそんな思いを持ってくれるのか」と感動した。「生徒の活動記録」にあるカヌーの成績も大変良いが、これに続いて来年、留学生も含めて、カヌーの生徒たちが入学してくれるという見通しはあるか。

【山田委員】

- ・「活動記録」に名前のある生徒たちの中でカヌー経験者は1人で、インターハイに行ったメンバー。現在、カヌー文脈で入学する生徒は学年で1～2名ほど。カヌーの嶺北高校はまだ全国区ではなく、高知県代表になって久しぶりに名前が出たという状況。次の段階として、全国大会で上位に入り「カヌーと言えば嶺北高校があるね」と言われるようになってくると、県外からの受験生にカヌー経験者が増えてくるかもしれない。ただ、顧問は毎年、開拓に行っており、今年も三重県の中学校に行った。中学2年生の時期にそういった説明をするようにしている。

【山下委員】

- ・是非増えて、カヌーの嶺北高校になってもらいたい。

【山田委員】

- ・初心者がしっかり育っていくということが大事と思っているが、土佐町の支援もあって高いレベルの生徒への対応も可能であるので、結果が出て増えてくれば、と思っている。

【高橋委員】

- ・3年生の発表を聞いて、自信を持って堂々と自分の意見を言える生徒になっている、大きく成長していると強く感じた。友人が発表した後の意見や、友人同士で応援し合ったりしているところ、仲の良さや団結力など、すばらしい方向にむかっている。
- ・懇談会の際に、「県外から来ている留学生がいい刺激になってくれる」と地元の生徒が言っていた。生まれ育った環境や文化が違う中で様々な意見を受け入れるということは非常に大事なことであり、異なる意見を聞いてどの子も成長しているのではないかと考えると、やはり留学生の受け入れは良い取組として続けていかななくてはいけない。公設塾について「勉強する環境を作ってくれるのがいちばん良い」という発言もあり、嶺北高校・本山町・土佐町が協力して取り組んできたことは間違っていないと思った。

【油野委員】

- ・「嶺北探究」の授業では、生徒の皆さんが自分を持って発言しており、着眼点も非常に面白いものがあった。柔らかい頭でないとできないと思うが、先生方がそういった主体性を否定するのではなく肯定することで考えさせる、というプロセスを改めて感じた。

○野球同好会について

【油野委員】

- ・以前の新聞に「高校の野球部が大会に出られない」という意味の記事があったと記憶しているが、来年は公式戦にでるといような動きはあるか。

【山田委員】

- ・野球は、昨年度の活動を受けて今年度は同好会に昇格した。来年度の予定と

しては、部活動＝部に認めてもらいたいという思いで彼らは活動している。同時に、様々な条件を満たして高野連に登録されて、試合ができる、練習試合ができるという環境になりたいとも思っている。

- ・ただ、現在7名しかいない中で、メンバーの大多数は来春3年生になり夏の甲子園大会予選で引退する。新チームには最低2人しか残らない、というような状況で高野連が本校の加盟を認めることは難しいかもしれない。部員数についてのルールはないということだが、練習する安全な環境があるかという点や、単年度だけではなく今後の見通し、例えば地元の小中学校の児童に野球人口が一定数あるかという持続性などが重要なポイントと聞いている。
- ・高校野球人口が少なくなる中で、最近では連合チームというのがいくつかあるが、高野連は単独で練習できるのが望ましいと考えているのではないか。本校がどこか別の学校と連合で出るとしても、行くにしても来てもらうにしても非常に厳しい環境にあるので単独で何とかしたいという思いはあるが、高野連へ来年すぐに加盟ということは非常に厳しいかもしれない。
- ・体験入学では5名ほどが野球の体験にきてくれたと聞いており、その子たちには是非入ってもらいたいという気持ちがある。地元で言うと土佐町中学校の野球部に所属している生徒は本校にとって非常に大事な存在となる。高野連に登録もできていない、まだ部にもなっていないというところで、しんどいことではあるだろうが、先輩と一緒に活動してもらえないかという思いでの発信はしている。
- ・地元で応援してくださる皆さんから寄付等をいただき、新聞への投書をした方からも「応援の気持ちで投書した」と仰っていただいた。何とかしたいという気持ちではいるが、生徒に対しては、最初からすぐに整えられるということは言っていない。厳しい道のりだと言いながら、彼らの意思を尊重しつつ、やれるところまでやってみるという挑戦をさせている。長い目で見ていく必要もあるが、彼らには何とか最後の花を咲かせて環境を整えたいとも思っているので、9人揃えば申請する方向で考えている。

【岩本委員】

- ・来春に同好会から部に昇格すれば嶺北高校野球部50年ぶりの復活となるということで、RKCテレビで特番を組もうと、制作をしている私の知り合いと一緒に野球をやった同時代の人から、プランができあがったという話を聞いている。野球部OBの声や地域の良さなど、様々なものをおりませた内容で特番を組みたいので、是非とも嶺北高校野球部を復活させて欲しいとのことで、各所に話をしている。
- ・今の話にあったように9名の部員を確保して部として復活できれば。資金面でもOBを含めて全面的に協力しようという声もあるし、特番の制作にかかる費用も様々なかたちで支援をしようという話もでてきている。梶原高校の

あれだけの動きを見ると、この嶺北高校でも野球部を、という機運も盛り上がってくると思う。皆さんの力を借りて取り組んでいけたらと思っているのでよろしくお願ひしたい。

○学校の取り組みについて

【神野委員】

- ・保護者だがなかなか学校行事に参加することができず、今日の授業を参観して、とても学校の雰囲気が良いと感じた。1人1台のタブレットをそれぞれ使いこなしている子どもの姿も、こちらが習わないといけないと感じるほどだった。仲が良いのは分かっているが、どの学年も学ぶ姿勢や雰囲気が大変良い中で授業をしていたという印象。
- ・懇談会での県外生の話では、田舎・自然・人間性が良いということ子どもたちからの声で聞いて「ああ、そういうところでいいんだ」と感じさせられた。自分自身はずっと土佐町で生活してきているので、これまでは「なんでこんな田舎がいいのだろう」「なんの魅力があるのだろう」と、正直分からないところがあったが、居心地が良いと言ってくれた1年生の言葉は大変嬉しく聞いた。
- ・学校も、修学旅行など行事への生徒の思いや可能性に対して、だめと言うのではなく一緒に考えるという行動をしてきていることは大変ありがたい。修学旅行の日程を変えるという絶対ありえないと思われることを変えてくれたことはとても大きい、と他の保護者と話したこともある。もちろん難しさもあると思うが、少人数だからできることに取り組んでくれることは嶺北高校の大きな魅力だと思う。保護者としてありがたく思っている。

【徳橋委員】

- ・「学校経営計画・学校評価」の中間評価で、いじめ件数1件・解消1件とある。すでに解消されたということだと思うが、個人が特定されない範囲で、どういうふうな状況であったかを。

【山田委員】

- ・3年生男子から「自分はいじめられている」という訴えがあり聞き取りをしたところ、もともと小学校や中学校が同じ子たちで、後輩から先輩がいじられるという感じのことが本人としては嫌だという内容だった。後輩である生徒を呼んでそういう関係性が良くないことを説明し、今後どうやって間柄を立て直していくかという話し合いをした。
- ・暴力や暴言による何かがあったというのではない。3年生はどちらかという大人なのだが、下級生の方は子どもっぽいアクションをしてくる。それに対して、これはいじめじゃないか、自分は嫌なんだと訴えた。いじめという言葉で訴えがあったので、対応する会を開いて今後そのようなことがないように話し合いをして解消させた、という報告をしている。

【徳橋委員】

- ・ いじめは案件があったら県教委に報告する仕組みになっているのでは。

【山田委員】

- ・ そのようになっており、同じ内容を報告している。

【徳橋委員】

- ・ 中間評価を受けた今後の取り組みについては、「取組を継続する」と表記されているが、特に学校として、この項目について重点的に取り組みたいというものがあれば。

【山田委員】

- ・ 学力支援にはしっかり取り組んでいるので、そのうえで3年間を見通して特に上位層を伸ばして進路希望をしっかりと実現できるような支援という意味で、公営塾との連携のあり方など組織的に取り組んでいきたい。上位層は国公立大学を志望している者が多いが、塾も教科については現状で個別支援的なものにとどまっている。より組織的な取り組みにすることで結果が伴えば、嶺北高校からも塾との連携で国公立大学に進学できるということが目に見えてわかってくる。今年度に限らないが、公営塾との連携をそういった方向に持って行きたい。
- ・ なかなか難しいが、家庭でのスマホ使用時間について、今は宿題が終わってから3時間まで、時刻は12時までと、保護者の皆様のご協力も得ながら健康睡眠時間の確保や学習時間の確保に取り組んでいるが、ここ数年はスマホ使用時間が3時間以上の割合が右肩上がりが増えてきている。寮生であれば寮の管轄の長とも話をしていく必要があるし、コロナ禍で保護者の方との会議や研修会もできていないので、今一度そういった健康面も含めての目線合わせをしていきたいと考えている。

【徳橋委員】

- ・ スマホの使用というのは、ほとんどゲームなどをやっているということか。

【山田委員】

- ・ そういう使用についての調査。学習時間以外で、音楽を聴いたりゲームをしたり友達とのやり取りをしたりと、そういう内容で1日何時間くらい使用しているかという調査。

【徳橋委員】

- ・ コンソーシアムに関して、1年生がフィールドワークをしたということだが、これは継続的に計画して、こういうかたちで1年生は来年以降も取り組んでいくということで良いか。

【三谷推進員】

- ・ フィールドワークは絶対、という学年もあるが、毎年こういったかたちで土佐町や大豊町のどこかに、という形式ではないと思う。今回の授業の組み立てと

して、4町村の話を聞いた後、ここをもっと知りたいというアンケートを生徒たちからとってフィールド先を決めた。授業の進め方が変われば、あらかじめフィールド先を提示したうえで学生がどこに行きたいか決めて行くなど、その方法は様々になってくるが、フィールドワーク自体には行くと思う。

【徳橋委員】

- ・探究のテーマを考えるうえでのきっかけづくりにはなる。そういった場を設定してあげることで、より探究に向けて良い方向に向かうと思われるので、生徒の希望も聞きながら実施をしていただければ。
- ・構想図の中の「れいほく未来創造協議会」の「コンソーシアム窓口担当者」の設置は。

【三谷推進員】

- ・まだできていないと思う。

【徳橋委員】

- ・事務局長が対応してくれているという段階か。

【主幹教諭】

- ・将来的にはこういう体制にしなくてはいけないが、今年できたばかりということもあり、まだコンソーシアム自体の実態がともなっていないところもあって、来年以降は更にこの概念図に近い形に実態を近づけていかななくてはならないと考えている。

【徳橋委員】

- ・現状では推進員の方でいろいろ調整しているという理解でよいか。

【三谷推進員】

- ・今はそうしている。

【高橋委員】

- ・懇談会のときに、生徒から、給食だけではお腹が減るという話があった。難しいかもしれないが、何か支援をしてあげたいと思う。

【山田委員】

- ・ぜひお願いしたい。例えば給食センターのご飯の量が現状では高校生も中学生も同じなので増やしてもらうことなど考えるが、発言した生徒はカヌー部員でかなりアレルギーを消費しているので、給食センターの対応だけでは難しいかなとも思う。

【高橋委員】

- ・土佐町「どんぐり」のパンを売るなどは。

【山田委員】

- ・火曜日は「どんぐり」が来て校内でパンを販売している。それを増やすことは難しいことではないと思うが、先方の体制を検討する必要があるかと思う。

【高橋委員】

・せっかく生徒が話をしてくれているので返事をしていかななくてはならない。

【山田委員】

・給食センターと話ができたらと思っているが、定量で金額も同じという前提でなので、これについては難しいかもしれない。「どんぐり」の方は、問い合わせることはすぐにでもできると思う。

【高橋委員】

・「どんぐり」は給食の時間以外に販売しているか。

【山田委員】

・給食の時間に販売している。給食を食べ終わった生徒や弁当の生徒が買いに行く。お昼の時間帯に30分間ほど。

【高橋委員】

・自分たちの時には生徒が多く売店もあった。

【神野委員】

・私が高校生の時は、食堂に給食の人がいてうどんなどを販売していた。

【岩本委員】

・自分たちの頃は校門を出たところに店があってパンなどを売っていたので、部活動に出る前にお腹が空いたら皆そこでパンを買って食べるなどしていた。育ち盛りだからお腹が空くだろう。「とくし丸」などに来てもらえないか。

【山下委員】

・関係者に相談してみようと考えている。

【松岡委員】

・学校経営計画の中の体験入学に関する記述の中に、アンケート結果で嶺北高校への進学希望者が23名、迷っている者が15名とあるが、学校が直接話をして、迷っている理由などの把握があれば。

【山田委員】

・高石委員から去年、アンケートの聞き方を変える提案をいただいていたが、そこまで至っておらず同じアンケートとなったのでここまでしか把握できていないが、迷っている者は確実に増えている。体験入学までいろんなアピールもしてきたので、それまで地域外に出ようと思っていたが嶺北高校にも心が動いて揺れている子が現れた、というふうに好意的にとらえている。

【松岡委員】

・そういうことであれば喜ばしい。

【山田委員】

・アンケートの聞き方を変えていくことは去年も議論していただいたので、今後は変えていきたい。

【松岡委員】

・そういう声について、できるだけ詳しく把握できたら、説明の仕方など工夫が

できるのではないか。

- ・留学制度が始まり、最初の年は1学年だけで2・3年は地元生というところからのスタートだったが、今は1・2・3年の各学年でそれぞれ当たり前に留学生と直接交流している状態。高橋委員からも互いに刺激し合うという話があった。現在、全学年に留学生がいる中で、以前と比べて変わってきたと気がついているところがあれば。

【山田委員】

- ・変わってきたと直接生徒の声で聞くのは、今の3年生や2年生から。普段の生活の中でも仲が良く、地域外生と地元生で仲違いしているというようなこともない。むしろ部活動であったり、その他の活動であったり、一緒に何かをやって自然に溶け込んでいる。その中で刺激を受けているというのは間違いない。高知の共通の言葉や事象について、地域外生の子から「何のこと？」と聞かれたら、更に説明しなくてはいけないので、そういったことを通して自分の地元のこともよく分かるし、コミュニケーションも深まり、お互いのことがよく分かる。地元生だけでは従来の考えから出られないということもあると思うが、特に探究学習などでも、それぞれの地域でいろいろな小学生時代、中学生時代を過ごしてくれているので、そういったことも生徒たちの議論・協議の中で出てくるだろうと想像している。そういう関わりが生まれることを自分も願っていた。
- ・少しくらいは仲違いしてもいいのではないかと考えていたが、まだないようだ。主張をお互いにし過ぎて衝突するところまでいっても、その後でより良い関係を目指してくれればと思うが、今の生徒たちは皆優しいので、そこまでには至らず、お互いのことを優しい心で理解しようとしている。今後も生徒たちの声を聞いてもらう機会を持ちたい。

【岩本委員】

- ・地域外からの生徒の受け入れについては以前から話をしており、現時点でどういう状況か分からない点もあるが、寮に入る者以外は受験ができないというようなことにはならないような仕組みを作らなくてはならない。身元引受人が地元にいなくても法人が保証することで受験はできるようにする、寮に入れない者が合格した場合は当然サポートするとはっきり答弁をしている。積極的に受け入れることを全面的に出さないといけない。寮は10名しか受け入れない、寮に入れる者しか試験も受けられないし合格もしないというような状況のままでは伸びしろがなくなってしまう。寮に入れない場合は別の方法を考えればよいことであり、できるだけ多く嶺北高校を志願する子どもたちを増やしていかないと、話題になっている野球部などもできない。言っていることとやっていることが矛盾していることになる。生徒の数を増やすことが課題。ちょうど入学希望の時期になり、教育委員会ともそういう話をして

きている。10名以上が受けられる状況を作っていただきたい。合格していなければ仕方がないが、合格した場合は10名以上でも入学させるというスタンスで取り組んでいかないといけない。

【徳橋委員】

- ・岩本委員の言われるとおりに思う。事情はいろいろあるだろうが、まずは嶺北高校に行きたいという生徒の受験機会を奪うということは避けなくてはならないので、検討されたい。
- ・来年度に向けて、野球部の応援はこの協議会でもしなくてはならない。委員の皆様にもよろしくお願ひしたい。

委員による協議内容は以上。

4 閉会